様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２２０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１２８２

研究課題名（和文）現代の子供の友人関係における特質と生徒指導システムのあり方に関する実証的研究

研究課題名（英文）the distinction of today's children's friendship and the present situation of school guidance system in Japan

研究代表者
遠藤　忠（Endo, Tadashi）

宇都宮共和大学・シティライフ学部・教授

研究者番号：１０１０４１１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　期間内に以下の2回の調査を行いその結果を日本特別活動学会第24回大会及び第25回大会で発表し、さらに『宇都宮共和大学論叢』にその一部が掲載予定である。
　2014年度に「現代の子どもの友人関係における特質に関する調査」を行い、周囲の子どもとの人間関係を過度に意識する傾向については2003年に行った同種調査とほぼ同様の結果が得られたが、過度に意識する傾向が弱まるとともに対教師関係の良好化の傾向がみられた。2015年度に行った教員調査では、2003年調査に比べ「声をかける」「ほめる」「相談を受ける」などの行動が増え、それらの行動が学校行事の指導において多いことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　In the period of 2014-2016 years, we research on the distinction of today's children's friendship and the present situation of school guidance system in Japan, respectively. Furthermore, the first half of results was published on the Journal of Utsunomiya Kyowa University №18 (2017.5.).
 2014-2015 years, we conducted the research on the distinction of today's children's friendship in Japan. As results, in comparison with the same kind of research we conducted 2003 year, we got almost similar results, except for several contents, for example, slight reduction of ratio of children who have nervous consciousness to classmates and improvement of children's feelings toward teacher. By the research which we conducted in 2015-2016 years, we clarified increasing teachers' behaviors like “address children”, “speak well to children”, “give advices asked by children”, and these behaviors appear in school events more often than in other cases.

研究分野：生徒指導論　特別活動論

キーワード：子どもの友人関係　生徒指導システム　特別活動　自律性　他者の受容　指導性　行事の練習　話し合い活動

１．研究開始当初の背景

自己の形成は人間関係が大きく影響する。子どもであればなおさらであり，子どもの人間関係においては，友人関係が多くを占める。

いつの時代でも，子どもは友人関係について「楽しさ」を語ることが多い。しかし，その一方で，それとは背反する「つらさ」を語ることもある。先行研究としての調査において，藤田英典らは「グループ内での軋轢や葛藤」[1] を指摘し，中島喜代子らは「友達に気を遣う」[2] 傾向を示唆する。岡田努は，そうした「つらさ」の中で「傷つけ回避」[3] などを同時に感じていることを明らかにしている（これらの先行研究については櫻井の総括[4] を参照されたい）。

しかし，それらの調査は，現代の子どもの動態を調査したにすぎず，過去との比較ができていないうえ，子どもの自己認識との関係も明らかにできていない。

2003年に長田・櫻井らは「少年の世界―世代間比較調査―」を実施し，その結果から「現代の子どもは，祖父母世代および父母世代の子ども時代に比べると，友人関係にかなりナーバスになっている傾向がある」と分析した。その10年ほどあとの2014年時の子どもの友人関係はどうなったか。

２．研究の目的

本研究は，二つの部分よりなる。

まず、2003年に行われた長田らの調査と同じ質問紙を用いた世代間調査により，過去と比較可能な現代の子どもの特質と，子どもの友人関係のマイナス面と自己認識との関係を明らかにし、子どもの人間関係意識と学校適応の状況を明らかにしようとする。

さらに、ここで明らかとなる子どもたちの友人関係意識の状況が学校における人間関係を通じた生徒指導のあり方とどのように関わっているかについて明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

(1)2014 年調査

1)調査対象：小学 5 年生，中学 2 年生，高校 2 年生

2)調査地域：つぎの方法により調査地域を選定した。①全国を北海道東北地方から九州地方まで通常の地方分割により 7 地域に分ける（北海道は東北と合体）。②その中の東京 23 区，神奈川県横浜市，愛知県名古屋市，大阪府大阪市は都市部として別建てとする。③それらの都市部を除く 7 地域で小中高それぞれの学校総数がそれぞれの地域の中間値を示す県を選定する。④層化割り当て無作為抽出法（その各県および各都市部の小中高それぞれの学校総数に比例させて各地の抽出校数を割り当て，『全国学校総覧』（原書房）に基づいて乱数表で小中高を無作為抽出する方法）による。ただし，児童生徒が全学年で 100 名以上の学校に限定。⑤該当の各校に調査協力を依頼する。

協力をいただいた地域と学校数はつぎのとおり。

小学校＝青森 2，茨城 2，東京 1，横浜 2，石川 1，和歌山 1，山口 3，徳島 1，大分 2

中学校＝青森 3，茨城 3，東京 3，名古屋 1，岡山 2，徳島 1，沖縄 3

高　校＝石川 1，三重 1，山口 1，徳島 1，大分 1　　（総計 36 校）

3)調査方法：託送調査，質問紙法（質問紙ははじめから封筒に入れてあり，それが教師から児童生徒に渡り，家で回答して封筒に厳封し，教師に返却される。事情により二校では教室内で回答）。

4)回答票数：小学 731 票（回収率 97.0%），中学 1,442 票（89.4%），高校 1,218 票（79.5%）

5)有効票数：全問無答，いい加減な回答は無効票，質問ごとの無答は無答票として処理（本文の表を参照のこと。各問の無答も表では除外している）。

6)調査期間：2014 年 10 月～12 月。

(2)2015 年調査

2014 年調査と同様の方法で学校を選定し、

教員に対して協力依頼を行った。その結果、協力の応諾があった教員は以下のように2229名であった。

学校種	人数
小学校	459
中学校	745
高等学校	1025
総計	2229

さらに、全国で111人の退職校長会構成員の協力を得て世代間の比較も試みた。データ数が少ないので参考値にとどめた。

４．研究成果

2014年調査の結果から、以下の3点が明らかになった。

①2003年当時の父母・祖父母の子ども時代に比べると、2003年時の子ども（小5、中2、高2）も約10年後の2014年時の子ども（学年構成は同じ）友人関係に「ナーバス」になっている傾向がある（ここで「ナーバス」とは、神経過敏の意味で、友人との心理的な距離がうまくコントロールできないという負の心理状態で友人関係に過度に意識が囚われてしまう傾向をいう）。例えば、表１のように昔の子どもの世代に比べると、現代の子どもの方が「友達の誰か」に拒否感をもつ割合は圧倒的に高い。

②しかし、2003年の子どもと2014年の子どもを比べると、現代の子どもの方が友人関係にナーバスさを示す層がいくらか減少している。

表１　「そばに来ないでほしい」人はいるか

世代	「友だちのだれか」を選択	総数（人）
2003 祖父母	7.80%	1050
2003 父母	9.90%	4976
2003 子ども	21.60%	2477
2014 子ども	19.60%	2953

③子どもと教師との関係もいくらか良好化している。このことがナーバスさの低減に関連しているかもしれない。

例えば、「学校で先生と話すことが楽しい」と答える小中学生はどの世代よりも今回の調査時で多くなっている（表21）。

また、そばに来ないでほしい人に「ある先生」がいると答えた小中学生は2003年調査より有意に減っている（表22）。

さらに、悩みの相談相手として先生をあげる小中学生の割合も優位に増えている（表23）。

表21 「先生と話すこと」が楽しい

世代	学校で先生と話すことが楽しい	総数
2003 祖父母	8.3%	1106
2003 父母	5.9%	5095
2003 中学生	6.5%	691
2003 小学生	7.2%	893
2014 中学生	7.4%	1493
2014 小学生	12.0%	666

表22 先生への接触拒否感

世代	そばに来ないで「ある先生」	総数
2003 祖父母	5.9%	1106
2003 父母	8.8%	5095
2003 中学生	21.5%	691
2003 小学生	10.5%	893
2014 中学生	14.4%	1493
2014 小学生	5.9%	666

表23 悩みの相談相手

世代	悩みの相談相手，先生	総数
2003 小学生	8.8%	884
2003 中学生	8.3%	687
2014 小学生	13.5%	666
2014 中学生	10.2%	1493

以上のように2014年の子どもの友人関係に関する調査では、「友人関係にナーバス」という特性をもつ現代の子どもの姿が改めて確認でした一方で、ここ10年ほどでナーバスさの状況が若干改善されるとともに、対教師関係が同時に改善していることが明らかになった。

2015年調査では、この結果を受け教師を調査対象として生徒指導の視点から子供に対する教師の対応にいかなる変化が見られるのかについて検証を試みた。

①「ほめる」教師の増加。

表8　「よくほめていた」：小中学校限定

	よくほめた	ときどきほめ	ほめたことは	ほめなかった

		た	少ない	
現在	45.60%	51.50%	2.90%	0.00%
10 年前	32.30%	50.80%	16.90%	0.00%

「ときどき」はほとんど変化がないが、「よく」では 13%の増加がある。そのことよりも、「少ない」が大幅に減少していることが目立つ。2014 年子ども調査の「2003 年時よりも、子どもと教師との関係がいくらかは良好化した」ことと対応関係にあると言えよう。

②「声かけ」の増加。

表 11	「声かけするか」：小中限定			
	よくおこなう	ときどき	少ない	おこなわない
現在	58.40%	36.70%	4.90%	0.00%
10 年前	49.00%	42.50%	8.10%	0.40%

「声かけ」をよく行う教師が増えている。「声かけ」と「悩み相談」を過去一年間で受けたことがあるかとの相関を見ると、以下のように声かけをよく行う教師は悩み相談を多くの子どもから受ける傾向が高い。

表 12	「声かけするか」×「悩み相談」：小中限定、現在のみ			
相談/声かけ	受けなかった	1,2 人から	3,4 人から	5 人以上から
よくおこなう	16.50%	15.20%	35.90%	32.40%
ときどき以下	21.20%	27.10%	36.40%	15.20%

③「話し合い実践」が増えた。

「授業や学級活動などで、子どもどうしの話し合い」が 10 年前より「よく行う」傾向が強くなっていることが明らかになった。

表 13	「話し合い実践」：小中限定、現在のみ			
	よくおこなう	ときどき	少ない	おこなわない
現在	29.90%	52.40%	17.10%	0.60%
10 年前	12.10%	55.00%	30.60%	2.30%

また、「声かけ」の場合と同様に「話し合い実践」をよく行う教師は多くの生徒から悩み相談を受ける傾向が高いことが明らかになった。

表 14	「話し合い実践」×「悩み相談」：小中限定、現在のみ			
相談/話し合い	受けなかった	1,2 人から	3,4 人から	5 人以上から
よくおこなう	16.20%	16.20%	35.60%	31.90%
ときどき以下	19.20%	21.70%	36.20%	22.80%

④行事の練習時間の減少と行事の教育的意義

10 年前よりも行事の練習に費やす時間が少なくなる傾向にあるが、過半数の学校が「運動会等での全員参加競技やマスゲーム、合唱コンクールなどのそれぞれ一つのことにつき平均の練習時間はどれくらいか（昼休み等も含んだ合計）」に対して「8 時間以上」と回答した。

表 15	行事練習時間：小中限定、時代別（「担任経験なしは除く」			
練習時間	約 1～3 時間	約 4～5 時間	約 6～7 時間	約 8 時間以上
現在	13.40%	14.10%	18.20%	54.30%
10 年前	8.80%	11.70%	18.30%	61.20%

以下の表 16～19 にみるとおり、練習時間と「ほめる」、「悩み相談」、「声かけ」、「話し合い実践」とが相関していることが明らかになった。

なわち、練習時間が長いと「ほめる」傾向が高くなり、その傾向は 10 年前に比べてより強くなっていることが明らかになった。同様に、今回初めて調べた「悩み相談」も練習時間が長くなると「5 人以上から」相談を受けた教員の割合が高くなっている。また、練習時間が長くなると「声かけ」の頻度も、「話し合い実践」の頻度も高くなっていることが明らかになった。

表 16	「問 4 ほめたか」との関係：小中限定、時代別				
ほめたか/練習時間		よくほめた	時々	少ない	ない
現在	1～5	39.90%	57.10%	3.00%	0.00%
	8 以上	51.40%	45.60%	3.00%	0.00%
10 年前	1～5	24.50%	55.10%	19.40%	0.90%
	8 以上	28.00%	56.80%	15.30%	0.00%

表 17　「問 7 悩み相談」との関係：小中限定、現在のみ

相談/	受けなかっ	5 人以上か

練習時間	た	ら
1～5	18.60%	13.80%
8 以上	15.90%	35.40%

表 18	「問 10 声かけ」との関係：小中限定、時代別				
声かけ / 練習時間		よく行う	時々	少ない	行わない
現在	1～5	48.80%	44.60%	6.60%	0.00%
	8 以上	65.50%	30.30%	4.20%	0.00%
10 年前	1～5	44.60%	47.40%	7.50%	0.50%
	8 以上	60.20%	33.90%	5.10%	0.80%

表 19	「問 11 話し合い実践」との関係：小中限定、時代別				
話し合い / 練習時間		よく行う	時々	少ない	行わない
現在	1～5	23.60%	55.80%	19.40%	1.20%
	8 以上	35.20%	48.30%	16.20%	0.30%
10 年前	1～5	10.20%	53.00%	34.40%	2.30%
	8 以上	14.40%	62.70%	22.90%	0.00%

以上から、子どもと一緒になって行事などの練習時間を多く行う教師は、子どもの良い点を見いだして、よくほめ、声掛けもよく行い、子どもたちの話し合い活動も比較的よく行い、悩み相談もより多くの子どもから受ける。すなわち、子どもからの信頼がより厚いようだ。

学力向上の掛け声のもと、いわゆる主要教科の授業時数が増やされる中で、子どもたちの自主的・集団的活動である特別活動の実施時間数は一貫して減少傾向を示している。しかし、調査結果が示す通り、教師たちの創意工夫により、限られた時間を最大限に利用するとともに、話し合い活動との有機的な結びつきを図り、子どもたちの友人関係を効果的に指導することにより、その人格形成に成果を上げている教師たちが一定程度増えていることがうかがえるのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

遠藤忠・長田勇・櫻井誠・高林直人「現代の子供の友人関係における特質」『宇都宮共和大学シティライフ学論叢』第 18 号

〔学会発表〕（計 2 件）

遠藤忠・長田勇・櫻井誠・高林直人「現代の子どもの友人関係における特質」日本特別活動学会第 24 回大会自由研究発表（2015.08.23.）

遠藤忠・長田勇・櫻井誠・高林直人「近年の生徒指導システム文化の変容」日本特別活動学会第 25 回大会自由研究発表(2016.08.28.)

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
遠藤　忠（ENDO,Tadashi）
宇都宮共和大学・シティライフ学部・教授
研究者番号：10104118

(2)研究分担者（平成 26 年度まで）
長田　勇（OSADA, Isamu）
埼玉東萌短期大学・幼児保育学科・教授
研究者番号： 60221157

(4)研究協力者
長田　勇（OSADA, Isamu）（since 2015year）
櫻井　誠（SAKURAI,Makoto）
高林　直人（TAKABAYASHI,Naoto）
桜井　均（SAKURAI,Hitoshi）